

出版物のご案内

弘済学園では以下のような書籍を出版・販売しています。

以下は絶版で販売はできません。但し、学園にはあります。現在では、「精神薄弱」「知恵おくれ」の用語は適しません、当時の表記に従いました。

昭和34年	ひゅうが 創刊号 【詳細】 日向弘済学園の創設以来5年が経過し、その創設当時の経緯、かかえてきた課題等々について、松本征二、糸賀一雄、中村健二、矢部進、細野一良氏などが回顧し、次のステップを模索している。「まことに貧弱な報告書であるが、職員達が、終日つまった日課の合間に、不慣れな筆の運びに、幾夜徹夜し、しかも自分の足らざるをザンゲし、将来への熱き祈りをこめたものである」(中村健二)
昭和35年	ひゅうが年報 第1号 指導の全般について 【詳細】 日向弘済学園の成人寮併設に際して、成人寮に望むを長尾理事、糸賀一雄が書く。その号では、重症精神薄弱児の処遇について、精神薄弱児の生活における基本的習慣の躰について、日向弘済学園における創作活動、農耕部・畜産部について、精神薄弱児の体育指導の歩み、給食について等を内容としている。
昭和36年	ひゅうが年報 第2号 ケーススタディ集 【詳細】 比較的歴史の浅いこの世界は、今なお、啓蒙期のヒューマニズムの見地、愛情の観念の上にあぐらをかきすぎていることも事実だと思います…このため、ケーススタディに習熟し、これを科学的に駆使する以外に道はない—中村」との認識にたって、欠損家庭の精神薄弱青年、愛情に飢えた精神薄弱青年、テンカンと脳性マヒの子ども、精神運動発作のある子ども、小発作のある子ども、処遇に困る精神薄弱青年、頻度の多い無断外出児、職業指導を受けている白痴児、聾精神薄弱の子ども、勇と私などを内容としている。
昭和38年	ひゅうが年報 第3号 生活指導体系についての1考察 【詳細】 弘済学園が創設から10年たち、体系として、①個人の生活態度としての生活指導領域、②社会性の獲得領域、③生活能力としての作業学習領域を考えた。その最初の努力が結実した巻である。背景には中村園長がドイツのズデーデンで非常に清潔な施設をみた感動がある。現在の飯田園長を中心に、指導方法について、生活のしつけ取得の状況、しつけ取得状況の分析、について分析し、体系化への道作りをした。特筆点は、評価表が作成されていること、重度児者の定時排便指

	導、食事指導、着脱衣、就寝寝具の扱いについて検討が始まっている。
昭和39年	<p>ひゅうが年報 第4号 作業学習を中心にした指導</p> <p>【詳細】</p> <p>「昨年女子職員に先を越された男子職員の共同研究である。」作業体制と作業学習の考え方、現在までの変遷、現在の作業体制とその状態、評価表、教育の期間と教育の開始期、事例、作業学習により成功した事例、成功しなかった事例を内容としている。</p>
昭和41年	<p>ひゅうが年報 第5号 精神薄弱の自治生活を探って</p> <p>【詳細】</p> <p>「自分たちで自分たちの生活を築く自治制を取りながら自己の芽生えを育て、支援されながらも、生活を自分たちのものにしようとする時、はじめて自己の力が働き、苦手な自己統制も可能にさせ、その力が自立、そしてその個人の能力となっていく」という思想を背景に、精神薄弱における自治生活の実態、自治生活を育てるときにあらわれる諸点とその経過、自治に対する意識づけのための刺激、自由と責任の把握、自覚を持たせるための自治生活、アフターケアセンター（通勤寮）在寮生の状況、ケーススタディを内容としている。</p>
昭和42年	<p>ひゅうが年報 第6号 作業学習における段階的指導について</p> <p>【詳細】</p> <p>弘済学園が、積極的な療育機能を打ち出した時期に当たり、作業の指導体系を整理した著作である。作業担当の7職員が、自分のパートから作業指導の、導入、安定、進展の3段階のそれぞれに該当し、様々な課題を乗り越えていくケーススタディを行っている。構成は、段階に応じた作業の与え方、段階別事例研究として、停滞混迷している事例、どうにか安定している事例、作業を自分のものとして進展している事例、を取り上げ、考察している。</p>
昭和43年	<p>ひゅうが年報 第7号 精神薄弱重度重症の処遇を探って</p> <p>【詳細】</p> <p>「より緊急度の高い重度重症者の福祉が立ち後れの形になっているのは、生存権保障と社会的使命の理念からは片手おちといわねばならない・・・問題性の多いものや、能力の低いものは入園を拒否する施設が多い…」ことを背景に、重度重症者への指導体制の変遷、個別の事例、指導の実際を作業学習と躰指導の2面から14例をあげている。また指導のあり方の試論を発表している。終わりに、身近処理の習得と個の発達について、重度・重症をケアする指導者に要求されるもの、の章を設けている。</p>
昭和44年	<p>ひゅうが年報 第8号 精神薄弱のアフターケアについての1考察</p> <p>【詳細】</p> <p>本人そのものの生活能力、労働能力がある程度まで社会適応するまで施設で訓練指導されたならば、現実の社会、職場の生活に於いて能力が伸ばされる。」施設</p>

	<p>ですべての能力を完成させるのではなくて、現実社会でむしろ伸ばせる、と今日の支援就労にごく近い発想から、社会への通勤寮を法に先駆けて整備した結果のまとめである。労働能力の開発を図る指導、社会生活能力の開発を図る指導、職場の受け入れについて、家庭のあり方への指導、精神薄弱者の就労を支援するもの、精神薄弱にとっての就労と自己実現の関係への探り等を内容としている。</p>
<p>昭和44年</p>	<p>ひゅうが年報 第9号 精神薄弱収容(入所)施設における訓練指導体系 【詳細】 知的障害の入所施設として訓練指導体系を模索しながら11年が経過した。「障害児の教育は社会適応が終局の目的ではなく、子どもの個性や主体性を尊重し、子どもの持つ主体性の達成意欲を最大限に発揮させ、その結果、自らの生存への可能性を実現していく。すなわち、自己実現にある」との思想にたどり着いた弘済学園が、はじめて体系としてまとめたのが第9号である。内容は、第1部に日向弘済学園の概要、第2部に精神薄弱者の能力の捉え方、評価表、尺度表、第3部に施設における訓練指導体制であり、日向弘済学園のねらう精神薄弱育成の人間像、訓練指導体制の組み方、生指導体制と個の確立、自主的人間への育成、作業学習の段階指導、重度・最重度の指導、病質児者の処遇、体育指導訓練、行事の持ち方、第4部に就労後の指導でありアフターケア（通勤寮）の必要性、第4部に精神薄弱を家族にもった家庭の指導で構成されている。清水基金の助成をえて刊行したものである。</p>
<p>昭和47年</p>	<p>ひゅうが年報 第10号 精神薄弱と家族 【詳細】 「親の力で能力が付加できないかとあわてふためき、我が子の能力の程度をかえりみないでひたすらに加重負担をかけ、甲斐ない努力に親も子も疲れきり、性も根も尽き果て、絶望は何時しかあきらめに変化し、無意識の内に親子の情が薄れる」。こうした多くの親がたどる過程をプラスに転じるように、家庭支援をテーマとした。第1章では精神薄弱の子どもをもつ両親のたどった過程と今後の展望。第2章は精神薄弱をもった親の姿のいろいろ。－我が子を結婚にまで育てた例、その子のために家族が一つになった例、精神薄弱の子どもがいるということで奮起し成功した例、精神薄弱の子を金儲けに利用しようとした例、物質の確保のみで安泰と考えた例、家庭疎外になった例、我が子の問題性を理解していなかった例。第3章は、精神薄弱の子をもった親に望みたいこと。現実から立ち上がろう、育て方を学ぼう、子どもの変化をみる目をもとう、子ども自身の力を信じること、子どもの言い分を聞こう、横の繋がりを持とう、第4章は家庭での育て方について。生活指導訓練が何故必要なのか、具体的にはどのように教えたらよいのか、第5章は当園における父兄の会合と活動－父母の会、母親教室、父親教室、兄弟姉妹の会について、で構成されている。</p>

<p>昭和47年</p>	<p>ひゅうが年報 特別号 各種記録の様式・内容・記録方法—記録の利用などについて</p> <p>【詳細】</p> <p>知的障害児への指導支援はどうあればよいのか。まずは正確で緻密な観察と、事実を正確に記録していく作業とが不可欠である。記録は一定の様式を持っており、そのことで観察するさいの視点を与える。その意味で、どのような記録用紙を用いるかは、指導体系に係わってくる。ここでは弘済学園での記録用紙と具体的なその使用法を述べている。グループ記録、個別観察記録、個別訓練記録、健康管理記録、家庭記録、特別訓練記録、状態観察記録、学期案、躰指導記録、等々について述べている。</p>
<p>昭和48年</p>	<p>ひゅうが年報 第11号 精神薄弱の指導をめぐるレポート—園内職員研修から—</p> <p>【詳細】</p> <p>障害の重い人たちへの処遇のあり方に決定的な物が無い時、私たちの依拠するのはグループによるケーススタディである。弘済学園ではこのケーススタディを毎月1回、15年間は継続してきたが、その中から3編を選んだのが、この号である。第一編は、重度児の発達を促すアプローチはいかにあるべきか、であり、重度・最重度というレベルの人たちがどのように発達し変化していくかを追跡したものである。第2編は重度児集団におけるグルーピングについての1考察であり、重度児で構成されるクラスがどのような経過をへてグループが作られ行くか、第3編は重度クラスの一日のスケジュールからみた生活指導の実際についてであり、重度クラスがそれぞれは独立しながらもどのように連携をとって進めるか、の過程を述べている。</p>

弘済学園の教材活用 児童期編

飯田・三島編 学研 ¥2,400

【詳細】

発達障害のごく重い、つまりは前言語期にある重度知的障害をともなう児童に、あるいは自閉症傾向がある人たちに、どのような発達を求めたら良いのかーそれに必要な教材は何か、知覚・概念のみの発達に終わらず、社会性の発達をどうもたらせば良いのか、ーこうした疑問に対して、前言語期を約8段階に分けて、発達にそったステップ指導を示している。

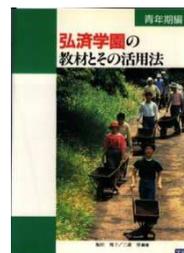


弘済学園の教材活用 青年期編

飯田・三浦編 学研 ¥2,400

【詳細】

弘済学園で過去45年の作業学習の歴史の中から選び抜かれた作業の方法と実際、それと指導理念について書かれている。過去には様々な作業形態があったが、支援対象となるケースが、中軽度知的障害から次第に自閉症を合併した人たち、行動障害の強い人たちに変化する中で、それに対応できている作業を示している。



以下も絶版ですが学園には若干の在庫があります。書店または弘済学園にお問い合わせ下さい。

母親と家族 中村健二編 ドメス出版社 ¥1,545

【詳細】

知的障害支援施設の役割には、本人への支援は当然としても家族への支援は欠かすことができない。そうした視点から入所施設である弘済学園がどのように家族支援をしているかを述べたのがこの巻である。内容は、第1章に精神薄弱を抱えた母親と家族とし、母親の悩み、家族の相克と苦悩、母子短期施設の開設、第2章に母親の自覚と歩みとし、我が子をする母親、母親に知ってほしい育て方、認識を固めるもの、第3章として成長する幼児と母親とし、適切な育児を受けていない精神薄弱幼児、伸びる芽、母親の理解と実践、第4章として家族と近親者の理解と協力とし、父親の理解と協力、家族の理解と教育、あるべき家庭、第5章に兄弟姉妹の役割とし、兄弟姉妹の現実、わきあがる若いエネルギー、必要な若人の結集した力、第6章にはともに歩む家族とし、到達した家族、到達に努力した家族、むすびとしている。



成長と生活 中村健二編 第4刷 1975年刊 ¥1,648

【詳細】

第1章では Aさん Bさんと2例の、情緒安定、作業療法、基本的生活習慣の確立、成人寮へという弘済学園の中での発達・成長の記録を、詳細に述べる。第2章ではそれを基礎に、弘済学園の描く精神薄弱育成の人間像、生きる精神薄弱を示す。第3章では、目標に向かっての指導的取り組み、生活力を身につける一つの帰属集団の適正化、自己覚知、生き甲斐を見つけたすものとしての作業学習—その段階的指導、感覚と体力を養う、医療との連携、第4章は、指導者の役割と責任、役割としては、精神薄弱者の人間としての価値観の確立、変容は指導者が作り出す、対象者の反応を大切に。責任としては、職員の視野の拡大、生きるということの認識について、社会啓蒙。それに、成長の段階と評価の評価表が添付されている。



就労とアフターケア 中村健二編 第4刷 1975年刊 ¥1,339

【詳細】

知的障害支援施設の役割には、本人への支援は当然としても家族への支援は欠かすことができない。そうした視点から入所施設である弘済学園がどのように家族支援をしているかを述べたのがこの巻である。内容は、第1章に精神薄弱を抱えた母親と家族とし、母親の悩み、家族の相克と苦悩、母子短期施設の開設、第2章に母親の自覚と歩みとし、我が子をする母親、母親に知ってほしい育て方、認識を固めるもの、第3章として成長する幼児と母親とし、適切な育児を受けていない精神薄弱幼児、伸びる芽、母親の理解と実践、第4章として家族と近親者の理解と協力とし、父親の理解と協力、家族の理解と教育、あるべき家庭、第5章に兄弟姉妹の役割とし、兄弟姉妹の現実、わきあがる若いエネルギー、必要な若人の結集した力、第6章にはともに歩む家族とし、到達した家族、到達に努力した家族、むすびとしている。



性と結婚 中村健二編 第7刷 1975年刊 中村健二編 ¥1,545

【詳細】

この本は、外には隠されていた精神薄弱青少年の性について、家庭及び、社会福祉施設における現実と、また出園後の青年達の生態をありのまま描いている。しかも・・・どうすれば、その青少年達の福祉にかなった処理ができるか、具体的な方法も提示してある。」第1章が、精神薄弱の性と結婚、第2章が性と結婚についての考え方、第3章が成長段階による性と指導—第二次性徴前にみられる性、第4章思春期における性—男性の場合、女性の場合、第5章異性との交際、第6章結婚で構成されている。



ある実践家の歩み 中村健二著

【詳細】

「筆者中村健二は誰も省みなかった精神薄弱援護と4つに取り組んで、… 近江学園を振り出しに、徳島県立のあさひ学園、ついで鉄道弘済会の千葉日向弘済学園、さらにその延長たる秦野市の弘済学園と、30年に亘って精神薄弱の援護に終始一貫して努力をしてきた。」その中村健二が、自分の職業生活での人との出会いを語る。第1章坂、第2章開拓、第3章精神薄弱と福祉施設—組織の重要性、成人対策の試行、重度化の道、研究、第4章拡張—渡米、拡張プラン、別れ、第5章現在—福祉、教育の組織、母子短期入所の開設、授産所の開設、職員 第6章出会い、一糸賀先生、田村先生、桜井先生、エキセン会、N君で構成されている。



知恵おくれの子どもの日常生活指導 着脱衣指導編 弘済学園・中村健二編 ¥2,200

【詳細】

現在、学研で刊行されている「発達遅れがある子どもの日常生活指導」の着脱衣の基礎編に該当する。内容は、第1章 着脱衣指導の原則と留意点、第2章 着脱衣指導開始の条件、第3章 着脱衣指導の実際、第4章 着脱衣の自立のためにがその構成である。第3章の内容には、最重度児に対する全面介助からの脱皮、重度でマヒのある子への導き、ろうあの子への重複障害をもつ子への指導、重度児の可能性をみちびきだす指導、型にはまって融通性の無い子へのアプローチ、なかなか積み上げられない重度児の指導例、短期間に技能を習得していく子の指導例、早期対処の重要性をものがたる幼児期からの指導例があげられている。

知恵おくれの子どもの日常生活指導 食事指導編 弘済学園・中村健二編 ¥2,200

【詳細】

現在、学研で刊行されている「発達遅れがある子どもの日常生活指導」の食事指導の基礎編に該当する。内容は、食事指導のねらいと留意点を第1章として、以下第2章では、食事指導の前提となる事柄、第3章では食事指導の実際となっている。第2章では事例をあげ、愛を失っていたケース、野菜の嫌いなケース、煮物の嫌いなケース、主食に偏るケース、変わった食べ方をするケース、母親を指導して偏食強制をすすめたケース、肥満児K君にみる体づくりと食生活、生活における体づくりの要件、があげられている。第3章では道具を使っての食事、食器の選び方と工夫、服飾との食べあわせの進め方、マナーの指導の項目だてでべられている。

知恵おくれの子どもの日常生活指導 排泄指導編 弘済学園・中村健二編 ¥2,200

【詳細】

現在、学研で刊行されている「発達遅れがある子どもの日常生活指導」の排泄の基礎編に該当する。

排泄は、障害児の社会生活を考える上で最も課題になる領域である。本書では弘済学園の数十年にわたる指導経過から、そのエッセンスを紹介している。内容は、排泄指導のポイント、排泄指導の前提となる事柄、排泄指導の実際として—おむつ生活からの脱却をめざす、遺尿のある子、おねしょをする子への対策、トイレの認知がない子に対する導き、便秘がちの子、排便時の衣服操作、排便後きちんとふけない子、トイレを汚したり水流し、手洗いができない子、身体的ハンディがある子、生理への手当とその指導、歯磨き指導のポイントとその指導、洗顔指導のポイントと実際、で構成されている。

精神薄弱児の育てについて 弘済学園 ¥2,000

【詳細】

弘済学園で実施している母子の3ヶ月の長期の濃厚な宿泊型療育支援の記録である。早期療育の有効さを諸処に述べながら、本書は、母子入園5年間の経緯の中で獲得したノウハウについて、精神薄弱幼児の実態と受け止め方—母子関係の確立の重要性、育ての実際、母親へのアプローチ、職員としての療育事項、アフターケアについて、参加者の意見のまとめ、で構成している。

以下は現在刊行されています。書店、出版社、あるいは弘済学園にお問い合わせ下さい。

発達に遅れがある子どもの日常生活指導 食事指導編 飯田雅子編 1998年刊 学研 2,500

【詳細】

「障害をもつ子ども達が自分のことは自分でする—つまり自立できるようになっていく—ということは、その子ども自身の生き方に直結していく」食事はその典型であるが、本書では食事指導の進め方をまず具体的に述べ、偏食のある子、咀嚼嚥下機能の弱い子、かまずに丸飲みする子、手づかみ食べをする子、スプーンがうまく使えない子、箸がうまく使えない子、たち歩き落ちていて食事に向かえない子、食べ物をもてあそぶ子、待てない子、人の食べ物をほしががる子、拒食になる子、過食気味になる子、食事に時間がかかる子、食事が早すぎる子、はんすうをする子、食べあわせのできない子、食器やスプーンを投げる子、外食のマナーが身につかない子、特異な食べ方をする子から構成され、食事に関する指導の段階表とその活用法が添付されている。



発達に遅れがある子どもの日常生活指導 着脱洗面入浴編 飯田雅子編 1998年刊 学研 ¥2,500

【詳細】

発達に遅れのある子どもの着脱、洗面、歯磨き、入浴指導の進め方について、どのような指導段階を踏んでいけば良いのか。支援が困難な具体例を通して語っていく。構成は、靴をはけない子、履いていられない子、靴下をはけない子、脱げない子、着る意欲や動作の出ない子、前後左右を間違える子、ボタン・スナップ・ファスナー付きの服を着られない子、衣類の整理整頓ができない子、着脱の遅い子、寒暖にあわせて衣類調節のできない子、TPOにあわせて身だしなみを整えられない子、特定の衣服にこだわる子、歯磨きに抵抗のある子、手洗いが遊びになってしまう子、うがいができない子、洗面・顔拭きをいやがる子、散髪に抵抗の強い子、鼻かみができない子、入浴をいやがる子、着脱、洗面、歯磨き等である。入浴に関する指導の段階表とその活用。



知的障害児者の生活と支援—支援者へのアドバイス— 青山・手塚 一橋出版

【詳細】

知的障害についての基本概念を示し、実際にケアにあたる人に有用であるように企画された。内容は、新しい時代に向けて、知的障害の概念と特徴、乳幼児機能特徴と介護・支援、児童期の特徴と介護・支援、成人機能特徴と介護・支援、高齢期の特徴と介護・支援、地域生活と社会参加、本人活動と支援、知的障害児者の実態からなっている。



子コミュニケーション 加藤 カツリ社 ¥900

【詳細】

やさしい語り口で、弘済学園という療育の場が、どのように重い知的障害の人、自閉症の人に向いているのかを語っている。編者の加藤さんは、教育や人の育ちに関心の深いジャーナリストである。第3者の眼から弘済学園を見て、弘済学園を支える理念や方法論について書かれている。



以下は現在若干部のバックナンバーがあります。弘済学園にお問い合わせ下さい。

平成2年	こうさい療育セミナー 第2回研究誌
平成3年	こうさい療育セミナー 第3回研究誌
平成4年	こうさい療育セミナー 第4回研究誌
平成5年	こうさい療育セミナー 第5回研究誌
平成6年	こうさい療育セミナー 第6回研究誌
平成7年	こうさい療育セミナー 第7回研究誌
平成8年	こうさい療育セミナー 第8回研究誌
平成9年	こうさい療育セミナー 第9回研究誌
平成10年	こうさい療育セミナー 第10回研究誌
平成11年	こうさい療育セミナー 第11回研究誌
平成12年	こうさい療育セミナー 第12回研究誌
平成13年	こうさい療育セミナー 第13回研究誌
平成14年	こうさい療育セミナー 第14回研究誌
平成15年	こうさい療育セミナー 第15回研究誌
平成16年	こうさい療育セミナー 第16回研究誌
平成17年	こうさい療育セミナー 第17回研究誌
平成18年	こうさい療育セミナー 第18回研究誌
平成19年	こうさい療育セミナー 第19回研究誌
平成20年	こうさい療育セミナー 第20回研究誌
平成21年	こうさい療育セミナー 第21回研究誌
平成22年	こうさい療育セミナー 第22回研究誌
平成23年	こうさい療育セミナー 第23回研究誌
平成24年	こうさい療育セミナー 第24回研究誌
平成25年	こうさい療育セミナー 第25回研究誌
平成26年	こうさい療育セミナー 第26回研究誌
平成27年	こうさい療育セミナー 第27回研究誌
平成28年	こうさい療育セミナー 第28回研究誌

以下に示すのは弘済学園の創設期からの発表論文・役割ですが、殆どが絶版となっています。

東日本愛護協会研究大会発表論文と発表者名

昭和34年	日向弘済学園における創作活動に関する一考察	矢部進
昭和35年	重症精神薄弱児の指導について	大保尚美
昭和36年	精神薄弱者の生活指導に於ける指導計画について	大久保雅子
昭和36年	施設の給食について	石橋強子
昭和37年	精神薄弱児の生活の躰に関する習得状況について	矢島スズエ
昭和37年	弘済学園の指導計画ーカリキュラム以前の段階ー	久保井保久

全国愛護研究大会発表論文と発表者名

昭和38年	<第1回> 年長で入園してきた者に対する生活の躰指導について	隈部弥生
昭和38年	<第1回> 作業学習における病的児(者)の指導についての1考察	飯田哲哉
昭和39年	<第2回> 親の教育一意識調査からー	滑川文子
昭和39年	<第2回> 重度重症児の保護と指導について	吉田千枝子
昭和39年	<第2回> 職業指導分科会(助言)	中村健二
昭和40年	<第3回> アフターケアの諸問題	川崎文男
昭和40年	<第3回> 精神薄弱児における自治生活	石塚佳津子
昭和41年	<第4回> 大会 司会者	矢部進
昭和41年	<第4回> 歩行訓練を通じての重症児の習得のプロセスについての 一考察	北島祐一
昭和41年	<第4回> 生活指導分科会 助言者	飯田雅子
昭和42年	<第5回> 作業学習における段階的指導について	大保尚美 青山章
昭和43年	<第6回> 最重度児の食事の指導	青山和子
昭和43年	<第6回> 当園で扱った精神薄弱重度・最重度といわれるものについ て	飯田雅子
昭和44年	<第7回> 精神薄弱における身辺処理能力の開発を図る指導	高村満妙子
昭和44年	<第7回> 最重度児における歩行訓練を通じた移動能力開発につい ての1考察	北川博嗣
昭和44年	<第7回> 情緒障害がありスムーズに意思表示できない者の意思交	松本幸雄

	換能力の開発をねらった指導 - 内面的考察を通して彼の意思表示を知り指導を試みたA. Tの事例を通して -	
昭和44年	<第7回> 施設運営の近代化 - 当園の歴史的変遷からの考察 -	矢部進
昭和45年	<第8回> 社会性を如何に養うべきか - 外出を通しての指導から -	右沢紀子
昭和45年	<第8回> 作業能力を如何に高めるべきか - 教材の与え方とその配慮の1例から -	川崎文男
昭和45年	<第8回> 自己指南力を如何に養うべきか - 職業観の確立を図る指導から -	高村勲
昭和46年	<第9回> 精神薄弱児における諸能力にみる発達の相関性とそれに対する指導	須藤契子
昭和46年	<第9回> 意思交換能力を育てる指導	滝沢浄
昭和46年	<第9回> 強度に偏食を持つ重度児の施設における食事の定着をみるまでの2年10ヶ月の経過 - 栄養士の立場から -	新井美知子
昭和47年	<第10回> 病的傾向を持つ精神薄弱児への取り組み - 治療教育の1環として -	矢野勉
昭和47年	<第10回> 通勤寮 分科会 助言者	矢部進
昭和48年	<第11回> 生活指導分科会 助言者	中村健二
昭和48年	<第11回> 新入園生を受け入れての観察教室の導入についての考察	加藤邦彦
昭和49年	<第12回> 難聴障害を重複して持つM. W君の織物学習を通しての取り組み	高橋栄七
昭和49年	<第12回> 自閉的傾向を有するケースに対する作業学習における導入のためのアプローチについての考察	松崎茂樹
昭和50年	<第13回> 幼児施設での計画と方法はどうか 助言者	中村健二
昭和50年	<第13回> 未訓練児を施設に受け入れての展開に関する考察	湯浅公弘
昭和50年	<第13回> 重度精神薄弱者の知能と日常生活行動との相関についての横断的研究	三島卓穂
昭和51年	<第14回> 母子短期入所の3年間の状況から	青山和子
昭和51年	<第14回> 精神薄弱者授産における作業展開の1考察	三浦啓
昭和51年	<第14回> 精神薄弱施設における体育指導	中西利治

昭和52年	<第15回> 精神薄弱児教育にモンテッソーリ教育法を実践してみても考えること	佐藤毅
昭和52年	<第15回> 重度児の治療教育の実践と問題について 助言者	中村健二
昭和52年	<第15回> 精神薄弱者授産における職種の適応性に関する1考察	正田公司
昭和53年	<第16回> 全体発表司会	矢部進
昭和53年	<第16回> 幼児精神薄弱児の育てのポイントと好ましい母親のあり方	橋本裕樹 渡辺美佐緒
昭和53年	<第16回> 発達障害部会 助言者	飯田雅子
昭和53年	<第16回> 年齢8歳から14歳女子児童集団における生活の展開と身辺自立のための指導の実際	竹腰郁子
昭和53年	<第16回> 作業学習における適性処遇について	支部一郎
昭和53年	<第16回> 指導運営部会 助言者	矢部進
昭和53年	<第16回> セミナー 施設の体系化	中村健二
昭和54年	<第17回> 精神薄弱施設における体育指導 －体育プログラムの中のトランポリン指導－	野村進
昭和54年	<第17回> 問題を持つケースの扱いを通しての一考察 －U君とI君の事例を通して－	岩橋茂
昭和54年	<第17回> 学齢終了児の入所における作業導入への一考察	渡辺典夫
昭和55年	<第18回> 重度児(女子)の処遇のあり方を探る一考察	島津幸政
昭和55年	<第18回> 成人重度者の作業への取り組みに関する考察 －屋内軽作業への導入を通して－	渡辺博
昭和55年	<第18回> 授産における作業能力と就労習慣の確立について	野田信雄
昭和56年	<第19回> 重度・重複障害児の療育を中心として 助言者	飯田雅子
昭和56年	<第19回> 劇活動を通しての集団展開	竹腰郁子
昭和56年	<第19回> 職員指導について	青山和子
昭和57年	<第20回> 自閉傾向を有するM君の安定に向けての医療との連携	早坂裕実子
昭和57年	<第20回> 重複障害児の作業への導入に関する一考察 －機織り作業への導入を通して－	高野正敏
昭和58年	<第21回> 精神薄弱施設の今日的課題と展望 シンポジスト	中村健二
昭和58年	<第21回> Y・K君の就労への歩み －屋外園芸作業を通しての一考察－	庄司謙吾
昭和58年	<第21回> 重度児の療育部会 パネラー	飯田雅子

昭和59年	<第22回> 社会参加に向けての意識づけに関する一考察	八田重則
昭和59年	<第22回> 自閉的傾向をもつ重度精神薄弱児の一作業指導について	小坂徹
昭和60年	<第23回> 施設生活における仲間関係とその展開	山崎久子
昭和62年	<第25回> 重度児のデイケアプログラムとその展開について	相原稔
昭和62年	<第25回> 授産重度園生の生活パートにおけるクラス運営と個への配慮のあり方について	山本晃
昭和63年	<第26回> 重度精神薄弱児(者)の作業指導の展開 ー紙粘土作業を通じての一考察ー	島田啓
昭和63年	<第26回> 青年期重度自閉症の処遇に関する一考察	池上啓喜
平成1年	<第27回> 年長重度自閉症のデイケアについて	富田耕司
平成1年	<第27回> 最重度児のグループ作りと個の安定	村瀬清二
平成2年	<第28回> 自閉で多動なA君の育ちを支えたもの ー療育プログラムの組み立てとその視点ー	姉崎則雅
平成2年	<第28回> QOLを高めるために ー自我発達段階を考慮した日常生活指導の実践と留意ー	高橋潔
平成3年	<第29回> 学齢児童の教育訓練の展開について ー養護学校と連携してー	石井学
平成3年	<第29回> 行動障害をもつ重度・最重度者の生活の整え	松山明美
平成4年	<第30回> 強度行動障害への対応 助言者	飯田雅子
平成4年	<第30回> 強度行動障害をもつケースの処遇	森公男
平成4年	<第30回> 重度精神遅滞をもつ人の生活の充実を考える ー授産に行くことで予想を遥かに越えた伸びをみせた一事例からー	高橋晶子
平成5年	<第31回> 緊張感の強い自閉症児の処遇について	山本雅夫
平成5年	<第31回> 人に対する強い構えが軽減し始めた増動・減動の障害をもつ自閉症A君の指導経過	佐藤毅
平成5年	<第31回> 入所型から通所型へ移行できた強い行動障害がある自閉症の事例	早坂光
平成6年	<第32回> 生活スキル獲得への支援分科会 企画・司会	飯田雅子
平成6年	<第32回> ADL形成への支援について	橋本裕樹
平成6年	<第32回> 性の理解と支援	青山和子
平成6年	<第32回> 行動障害がある人たちへの支援	三島卓穂

平成7年	<第33回> 強度行動障害をみせるケースの行動理解と療育の条件	大永篤
平成7年	<第33回> ボケーションナルケースワークの重要性と実際	夏目純一
平成7年	<第33回> 通所による家庭支援のあり方	村瀬節子
平成8年	<第34回> 人権擁護と支援活動分科会 司会	飯田雅子
平成8年	<第34回> 強度行動障害への支援	三島卓穂
平成9年	<第35回> 強度行動障害への支援分科会 指定講演・助言	飯田雅子
平成9年	<第35回> 障害の重い人, 対人関係を持ちにくい人たちの性への支援	姉崎薫
平成10年	<第36回> 強度行動障害への対応 助言鼎談	三島卓穂
平成10年	<第36回> 強度行動障害をとまなう自閉症3事例への支援	宮田明
平成10年	<第36回> 重い知的障害をもち行動障害をしめす人への自己決定の意味と支援のあり方	南川岳胤